

## 法王が再度入院へ

ローマ法王フランチェスコはこの度、腸閉塞を起こして緊急手術を受けた。強い腹痛を訴えた法王は6月6日の午前ジェメッリ病院に運ばれた。診断の結果、手術が行われた。法王は午後3時過ぎには、麻酔も切れて、冗談を言うことができるほど元気に回復していた。

午後7時には病院側の記者会見が開かれた。法王は意識もしっかりしていると発表された。腸の癒着があったので、開腹手術をして腸の悪いところを切除し、ステントで補強するというものだった。同じ手術をしたのが、2年前の2021年7月だった。その時には直腸を約30センチ切除していた。この時の診断は良性とのことであり、今回の手術により完治したと言えるだろう。癌の心配も無く、現在は他の病気も無い。

法王は麻酔が嫌いだと言われている。しかし、誰も麻酔の好きなものはいない。法王は、一時的にせよ、意識を失うのが嫌なのだ。2年前の時にも、今回の手術の際も法王は麻酔については何も怖がってはいなかっただけである。ただ、手術後は5日から7日間の病院での安静期間が必要である。しかし、ローマ法王は忙しい。そうはなかなか言うてはおられない。ともあれ、ローマ法王の面会は6月18日までの分は全てキャンセルとなった。

法王の夏の予定は、8月2日から6日まではポルトガルに、そして8月の末にはアジアのモンゴルに司牧の旅をすることになっている。それまでには体力も回復することだろう。

今回もまた、次期法王を決定するコンクラーベのことが話題になっている。誰が次期の法王として有力かはまだ噂として伝わってきてはいない。

## ウクライナとロシアに特使派遣

2022年2月24日に始まったロシア軍によるウクライナ侵攻は世界中を震撼させた。戦争を憎み、停戦を求め、真の平和を求めて行動し、その意を発表している人は数多いが、その筆頭はローマ法王だろう。ロシアの武力侵攻が始まるや、翌日には、ローマにあるロシアの大使館を訪れ、直接大使に会い、戦争に至った経緯を聞き、大使にロシア軍の早期撤退を訴えた。それ以降、法王は常にロシア・ウクライナ戦の停戦と平和を期待し、一般謁見の時には、よくそのことを話題にしていた。機会があれば、モスクワやキーウに乗り込んで、プーチン大統領やゼレンスキー大統領に会って、和平に対する話合いをしたかったのだ。

しかし、そのために、現在有する多くの任務を変更することが難しく、また法王の健康上の問題も持ち上がってきた。さらに、ロシア、ウクライナからも受け入れ許可の返事をなかなかもらえず、戦乱の時局は法王の両国訪問を困難にしていた。そこで、法王は自分の特使を両国に派遣することにした。この任に選ばれたのがイタリア・ポーニャの大司教のズッピ枢機卿である。ズッピ氏は聖エジディオ共同体の出身で、アフリカのモザンビークの政府派と反乱軍の調停に成功し、ローマで両派の代表による調印式を演出した。

ズッピ特使は6月5日にウクライナの首都キーウに到着した。紛争はロシアの攻撃がミサイルを使って、一層の激しさを増していた。ウクライナによる反撃も、ロシア軍に占領されている土地を取り戻すために、より一層活発化している時だった。

ズッピ特使はまずブチャを訪問した。ブチャは初期のロシア軍の攻撃が反人道的と非難された都市だ。その日のうちにキーウに入り、宗教界の代表者や政府高官に会った。「平和はただ単に夢としてあるのではない」と表明しつつ、まず人道的立場から捕虜になった双方の軍人の交換、さらにロシアに連れ去られた19,505人ものウクライナの子供達のウクライナへの帰還を成就させることを主張した。ズッピ特使はその後、ゼレンスキー大統領とも会見した。ゼレンスキーは特使に次のように語った。「5月13日にローマを訪問して法王フランチェスコにお目にかかった際、自分は停戦が真の平和をもたらすことにはつながらないと申し上げた。今、ウクライナには平和はない。ヴァチカンは、真の平和をウクライナに確立することを望む。それに協力してくれる国々やパートナーとは話し合いを続けていく」と。

これに対して、ズッピ特使は、ローマ法王の言葉として次のように述べた。「あなた方の涙は、私の涙であり、あなた方の痛みは私の痛みである。今日よりあなた方の子供は、私の子供でもある。ヴァチカンは子供たちの命を救うために、可能なことは全て行う」と。

ズッピ特使はキーウから直接モスクワに行く予定だったが、プーチン大統領以下モスクワ側の要人との日程が合わないために、いったんポーニャに戻った。その後ようやく日程の調整ができ、ズッピ特使は6月28日、ローマ法王の親書を携えてモスクワに到着した。

6月25日には、フランチェスコ法王がアンジェルスの日曜説教において、「平和のために祈ることを止めてはいけない。特にウクライナ人民の事は私の心の中にある」と宣言していた。ズッピ特使のモスクワ訪問の目的は、ヒューマニズムの理念を共有し、勇気ある行為を鼓舞することである。ロシア側の第一面会者はプーチン大統領の外務政策担当のコリ・ウシャコフであった。しかし人権問題の担当者は、彼ではなく、29日に会見したマリア・ルボーバ・ベローヴァ女史である。彼女は2021年よりロシア共和国の権利委員会のメンバーの一人だ。しかし、彼女はウクライナの子供達については一切知らないと言うばかりであった。

ズッピ特使は6月29日の午後にモスクワ大司教キリルに会うことができた。キリルは、言うまでもなくプーチン大統領の支持者であり、擁護者でもある。両者は、ローマ教会とロシア正教と協力して平和と正義のために、共に働くことができると語り合った。そして、大切なのは武器を用いた戦争を世界から無くすことであり、その意味で我々のミッションは緒についたばかりだと述べたのである。今回のモスクワ大司教のキリルは柔軟な態度だったことが、この会見からも分かるだろう。だが、戦争の最高責任者プーチンとの面会は無かった。